漱石『こころ』人間の二面性

Junko Higasa

夏目漱石が『こころ』で描いたもの。それは良心(自然)と自尊心（無意識の技巧）という人間の持つ「二面性」である。普段は良心に従って正直に生きている人間が、自分を護る必要が出来た時に自尊心から嘘をつく。その二面性は人間誰しもが備えるもので、善人が悪人に豹変する瞬間は、いつどんな場面で、どんな頻度で、どの程度現れるか予測がつかず、それは恐ろしい「人間の罪」を引き起こす。漱石はそれを表すために作中に「鏡」をかざす。立場が変われば相手と同じ行いを自分がする可能性があるということを映すために。それが以下の二章に凝縮されている。

まず(下)第 41 章で、自分の進む道として主張する「精進」の妨げになる恋に苦しむ K が、その悩みを先生に告白して、迷いを断ち切るために批判を受けようとしたとき、先生は K の口調を真似て『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』という彼の平生の主張を重ねて口にした。かつて先生に向って軽蔑を持って発した言葉を、そのまま投げ返された K は精神的に打ちのめされる。K を傷つけたもの、それは先生という他者の心に反射した自己の心だった。K は自分で自分を軽蔑したことになる。

そして続く第 42 章で消沈した K は『もうその話は止めよう』『止めてくれ』と悲痛な心の叫びを上げるが、K に先を越されることを怖れる先生は食い下がる。

『止めてくれって、僕が言い出した事じゃない。もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めても可(い)いが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか』

このとき先生は気付いていない。「精進」という自己への誓いを破った K と同様に、「叔父のように人を騙す人間にはなるまい」という自己への誓いを破った自分に。自分の良心を裏切ったもの、それは自分の自尊心だった。先生は自分で自分を非難したことになる。そして先生がそれに気付けたのは、「K の死因」を繰り返し考えたからに他ならない。それは同時に以下の人間の「孤独」に気付くことでもあった。

長年同じ目標に向かって信頼し合って進んできた男同士でさえ、心はひとつになれない。それが K と先生の「失恋」(慕う心を失う)という第一の「淋しさ」である。そして学問という高尚な理論をもってしても、人間の心の二面性に打ち勝てるとは限らない。その「理想と現実の衝突」が、学問の世界で優越を感じていた K と先生の第二の「淋しさ」である。そして「間違っていると気付いても、今更あとには退けない」という自尊心が引き起こす「人間の罪」が、K と先生の第三の「淋しさ」である。

精進を忘れて恋へ傾く K を先生が批判してくれたら、K の心は救われたかもしれない。先生の行いを K が諌めてくれたら、先生は K を騙さずに済んだかもしれない。そして先生の告白の決意を「私」が逃さなかったら、先生の命は救われたかもしれない。しかし自分の心に決着をつけるのは、結局自分自身の「良心」でしかない。(2015.8.19)